

アジア版エラスムス教員派遣・報告書

(フリガナ) 氏 名	アオヤマ カオル 青山 薫	所属（研究科、職名） 文学研究科 GCOE 特定助教（当時）
派遣先大学・ 研究機関、 研究科・研究所	大学・研究機関・研究科名 ウィーン大学 社会学部 エセックス大学 社会学部 Centre for Intimate and Sexual Citizenship (CISC) （ロンドン大学心理人間発達学部訪問は、先方の都合で中止した）	
	派遣先都市・国名 ウィーン（オーストリア）、コルチェスター（英国）	
	派遣期間 2010 年 7 月 18 日～7 月 30 日	
	受入研究者 Ms Danièle Lipp（ウィーン大学社会学部秘書） Dr. Róisín Ryan-Flood（エセックス大学 CISC 所長） Prof. Ken Plummer（エセックス大学 CISC 副所長）	
研究テーマ （日・英）	親密な人間関係、親密圏、親密権をテーマにする研究所、研究者に、これらのテーマをグローバルな教育連携や政策など公共的な目標に結びつけること、それに学部機関として取り組む新しさや意義について伺う。 Learning about emerging significant meanings of university institutions and researchers to link their thoughts on intimate relationships, intimate spheres and the intimate citizenship to publicly orientated aims such as globally coordinated education and policy making.	
1) 授業を担当した場合、講義名 授業は行っていない。 2) 講演をした場合、講演会のテーマ・タイトル・日時・場所・参加人数（概算）・主催者 講演は行っていない。		

- 研究機関、テーマ、授業・講演などの表記は日本語と英語の両方をお願いいたします。
- エラスムス派遣の成果について教育／研究面にわけてそれぞれ 1000 字程度で報告してください。（別紙使用。参考資料がある場合、添付してください。）
- 派遣教育・研究中の様子がわかる写真のファイルがあれば（肖像権に触れない 3000KB 以下）添付してご提出ください。本プログラム・ホームページのエラスムス事業のページに掲載いたします。

* 帰国後一ヶ月以内に GCOE 事務局宛 intimacy@socio.kyoto-u.ac.jp にメールでお送りください。

アジア版エラスムス教員派遣・報告書

教育面の成果

1) ウィーン大学社会学部

「研究面の成果」として後述する実証主義や現象学、批判理論と方法論にのっとり、学部としてとくに力を入れている研究教育分野のうち、親密権・親密圏との関係が深いのは、「家族生活」、「フェミニスト理論およびジェンダー研究」、「健康」、「(ヒトの)発達」、「移住とエスニシティ」、「社会階層化と不平等」の分野と思われる。今回の訪問は夏季休暇に重なったため授業に参加することは叶わなかったが、いずれの分野でも、講義でも討論中心の教育を行っているという。学部生でもみずからのフィールドを決め、具体的な社会問題について考察し、将来その知識を活かした社会貢献をめざすよう推奨されている。

社会全体における社会学という学問の地位の彼我の格差を痛感する解説を伺った気がした。しかし同時に、上記の各分野を主要なテーマにふくむ本 GCOE ならば、日本的な社会文化歴史的背景を実証主義・現象学・批判理論に結びつけて教育プログラムに反映させるようなことができれば、アジアのおもしろいカウンターパートになる、とも夢想された。

ウィーン大学は、ERASMUS プログラムの主導的役割を果たす大学のひとつであり、社会学部もパリ大学、プラハ大学と協定を結び毎年 10 人前後の学部・修士学生の交換を行っている。

2) エセックス大学 Centre for Intimate and Sexual Citizenship (CISC)

今回の訪問先である CISC は、その名のとおり、親密権および性的関係に規定される市民権について集中的に研究する組織である。2006 年に設立されたばかりということもふくめ、個人的な関係に端緒をみる社会問題の考察におけるユニークで新しい傾向を示している。

独自のカリキュラムをもっているわけではなく、学部・大学院教育は社会学部をつうじて行っているが、博士課程学生では、センター設立以来親密権・親密圏と公共圏の交差にかんするプロジェクトを実施する入学希望者が増えているという。Sage から発行されている専門学術誌 *Sexualities* は、専従編集部をこの社会学部におき、現在このセンターとの連携で編集されている。

親密圏を比較的新しい性関係を基盤にして広げる点、それをもって市民権概念まで改変しようという点は、本 GCOE と必ずしも一致する傾向ではないものの、このような斬新でダイナミックな発想が研究者ばかりでなく院生志望者の関心と呼ぶという点、世界的な発信を（英語がもともとの教育媒体であるメリットを割り引いても）成功させている点で、やはり魅力的な連携の相手ではないかと思われた。

研究面の成果

ウィーン大学社会学部は、言うまでもなく「ウィーン学派」社会学の拠点である。今日でもその伝統にのっとり、具体的な社会問題への関心と実証主義的方法論およびその現実への応用を教育・研究の旨としている。ウィーン学派は一方で、実証観点から発達した現象学的社会学や理論的実証主義という理論アプローチの発信源でもあり、もちろんその

アジア版エラスムス教員派遣・報告書

伝統も研究に反映させている。いわゆる「素朴な」数値主義的・証言中心主義的実証主義を避け、量的研究ばかりでなく質的研究や解釈学、批判理論に重点をおいた研究を推進しているのだ。この研究方針を貫徹できることと、それを前述の社会に開かれた教育プログラムにも反映させていることから、ポスト植民地主義の思想を経てもなお、あるいはそれを先方が抱擁しているからこそ、私たちがヨーロッパ社会学に学ぶところは依然として大きい、と感じざるを得なかった。

一方のエセックス社会学の伝統は、そのほとんどすべてをライフストーリー調査中心の質的研究に負ってきた。ただし、「批判的ヒューマニズム」の観点といった語彙が発信されてきたことに見られるように、ここでも批判理論の影響は顕著であり、近年は社会的政策的要請にしたがって、量的研究と質的研究の統合研究にも力を入れている。やはりこの多層性に学ぶところは大きい。その内部にある CISC は、現代象徴的相互行為論の先駆者かつ「親密権」または「性的関係にかんする市民権」概念を構築したまさにその人、Ken Plummer が副所長を、レズビアンカップルの子育ての国際比較研究で注目される Róisín Ryan-Flood が所長を務めている。このことから明らかなように、かつて「性的少数派」として調査対象でしかなかった人びとを、新しい親密な関係の基礎、ひいては伝統的ヨーロッパ市民権概念に加筆する主体、社会意識だけでなく法制度をも改革する主体として焦点化していることが何よりも特徴的である。

以上今回の訪問で学んだことを、私自身のジェンダー／セクシュアリティ・性労働・移住労働・感情労働研究の文脈において考えるに、以下の課題が今後ますます重要となるように思われた。それは、ジェンダー／ヘテロセクシュアリティ秩序をはじめとする二項対立思考の対象化、市民権・権利概念の現実に合わせて改変、個人と社会の関係を「個人の側」から理論化すること、当事者中心主義調査方法論の進展と政策への連関の模索、といったことである。くわえて、労働の問題からも人権の問題からも、市場との関係をこれらの考察・評価にふくんでいかななくてはならないだろう。具体的には、性労働にたずさわる人びと、移住する人びと、アンペイドワークをふくむケア・感情労働にたずさわる人びとが、これら課題にかかわる日本社会の社会意識、法制度、学界、政策決定者を、彼女たちの人間関係をとおして今後変革していくことを見据える調査が必要となるだろう。